

ワイルド、ドイル、秘密の手紙

大久保 譲

1. ワイルドとドイルの邂逅

アーサー・コナン・ドイルは自伝『回想と冒険』(1924)の中で、オスカー・ワイルドとの出会いを次のように回想している。1889年8月30日のこと、ドイルは『リピンコッツ・マンズリー・マガジン』のアメリカ人編集者ストッダードから招待を受けてロンドンに赴く。「文学の仕事でロンドンに出るのは二度目だった。[中略]ディナーには他に二人が招かれていた。ギルという愉快的なアイルランド人議員とオスカー・ワイルドだ。ワイルドは唯美主義の唱道者としてすでに有名だった」(Doyle, *Memories* 78)。シャーロック・ホームズを生んだ人気作家(1924年当時、ホームズ・シリーズはまだ断続的に『ストランド・マガジン』に連載されていた)が、背徳者の烙印を押されていたワイルドに向ける評価は予想以上に高い。

私にとって最高の夜だった。驚いたことにワイルドは『マイカ・クラーク』[刊行されたばかりのドイルの歴史小説]を読んでおり、しかも熱烈に賞賛してくれたから、私は疎外感を覚えずにすんだ。ワイルドとの会話は消すことのできない印象を私の心に残した。彼はその場にいた誰よりも優れていたが、それでも私たちの話に興味を持っているように見せるすべを心得ていた。彼には繊細な感受性と如才なさがあった。もし一人で喋りまくるだけなら、どれだけ冴えていても、本当には紳士とは言えないからだ。ワイルドは会話において、与えるだけでなく、きちんと受け取る人だった。とはいえ彼の発言はじつにユ

ニークだった。話は奇妙なほど厳密で、微妙なユーモアの感覚があり、ちょっとしたジェスチャーでニュアンスを補うコツを心得ており、これが余人にはない彼の特徴だった。[中略]

その晩の結果として、ワイルドも私も『リピンコッツ・マガジン』に小説を書く約束をした。ワイルドが寄稿したのが『ドリアン・グレイの肖像』だ。まちがいに高く高い道德の水準にある本である。一方、私が書いたのが『四人の署名』で、これでホームズが再登場することになる。(78-79)

『リピンコッツ・マガジン』に相次いで掲載された2つの小説についてはのちに検討することにしよう。初めて出会ったときのワイルドに対して、ドイルは惜しめない賛辞を述べているといい。明言はされていないが、アイルランド系スコットランド人だったドイルが、ワイルドに同郷人としての共感を覚えたことも想像できる。裁判でワイルドの不道德の証拠としてあげつらわれた『ドリアン・グレイの肖像』でさえ、ドイルはその「高い道德の水準」を賞賛する。では、ワイルド裁判はドイルによってどのように語られるのか。

その夜のワイルドの話には下品な考えなどひとかけらもなかったし、当時はそんなことを連想させなかったということは是非述べておきたい。しかし、何年後かにもう一度だけワイルドに会ったときには、気が狂っているという印象を受けた。たしか彼は、当時上演中だった自身の芝居を見たかと訊ねてきたのだ。見ていないと答えると、彼は言った。「見なきゃいけないよ。絶品だよ。天才の作品だ！」しかも大真面目にそう言うのだ。以前の紳士的な資質はどこへやら。その時も思い、今でもそう思っているのだが、彼を滅ぼした怪物的な事態は病理学の範疇であり、それを検討するのにふさわしい場所は警察裁判所ではなく病院だったのだ。(79-80)

ドイルにとってワイルドを破滅させた「怪物的な事態 (the monstrous development)」は「病理学に属する」(pathological)のものであり、ワイルドは

犯罪者ではなく治療されるべき患者と定義される。エディンバラ大学で学んだ開業医でもあったドイルが、世紀末の同性愛をめぐる医学的言説のネットワークに属していることは言うまでもない。1916年に反逆罪で処刑された旧知のロジャー・ケイメントについて、「心身ともにアブノーマルな状態にあることがいささか考慮されてもよいのではないか」として減刑を求めたさいと同様、ドイルの善意が「ほとんど犯罪的な無理解」(富山 343)となった例とも考えられる。こうしてワイルドの「罪」を「狂気」と読み替えて免罪したドイルは、最後に改めて「真のワイルドの姿 (The true Wilde)」を提示して回想を締めくくる。

ワイルドの短い小説『ドリアン・グレイの肖像』が出版されると、私は手紙を送って同作についての所見を述べた。彼からの返事はここに再録するにふさわしい。真のワイルドの姿を示しているからだ。前半は私の作品『四人の署名』に対する過分な賞賛なので省略する。

「私と人生のあいだには、つねに言葉という霧がかかっています。ひとつのフレーズのためなら、もっともらしさなど窓から捨ててしまいます。そしてエピグラムを用いるチャンスがあれば、真実を無視します。それでも私が目指しているのは芸術なので、私の主題の扱い方が繊細かつ芸術的に卓越したものだとなあなたが考えてくださって嬉しく思います。新聞の類は、私には好色家がペリシテ人のために書いたもののように思えます。どうしてそんな連中が『ドリアン・グレイ』を不道德なものとして扱えるのか、理解できません。あの小説の中では教訓を芸術的・演劇的效果で隠すようにせいぜい努めたのですが、それでもまだ、あの本の教訓はあからさますぎる、と思います」(Doyle, *Memories* 80)

『回想と冒険』でドイルがワイルドについて述べているのは以上ですべてである。さまざまな解釈を誘うとはいえ、分量にすればわずか2ページほどにすぎない。これがドイルがワイルドについて書いた最も長い文章であり、公刊されたほぼ唯一の文章でもある。とはいえ、同時代を生きた多産な作家として、ワイルドとドイルの作品からはいくつもの符合や共通のモ

チーフを見出すことができる。

本論では、まず直接的な関連がある『四人の署名』と『ドリアン・グレイの肖像』を比較し、次いでドイルの『ロドニー・ストーン』に暗号として埋め込まれたワイルドへの言及から、両者の関係の両義性を読み取る。最後に、両者に共通する「秘密の手紙」と脅迫の主題を、スティーヴンソン『ジークル博士とハイド氏』を補助線として用いながら考察し、19世紀末の小説において秘密とプライバシーの主題が遍在することを明らかにする。

2. 『四人の署名』、『ドリアン・グレイの肖像』、そして『ロドニー・ストーン』

回想にある通り、ストッダードの依頼を受けたドイルとワイルドは翌1890年の『リピンコッツ・マガジン』に短めの長篇を寄稿する。まず2月号にドイルが発表したのがホームズが登場する2作目の小説『四人の署名』(*The Sign of the Four*, 単行本のタイトルは *The Sign of Four*, 1890)であり、7月号にワイルドが『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 改稿された単行本は1891年刊)を掲載する。2つの作品の雰囲気は、驚くほど似ている。例えば『四人の署名』は退屈を持って余したホームズが、コカインの注射をする悪名高い場面から始まる。

シャーロック・ホームズはマントルピースの隅からいつもの瓶をひきよせ、つづいて、しゃれたモロッコ革のケースから、皮下注射器をとりだした。さらに、長く、しろい、だが強靱な指で、細い注射針の角度を調整すると、やおらシャツの左袖のカフスをまくりあげた。そのあとしばらく、その目は思案気に、無数の針跡でおおいつくされた筋肉質の前腕から手首のあたりにそそがれていたが、ややあって、鋭い針先がずぶりと突きたてられ、小さなピストンがぎりぎりまで押しさげられてしまうと、彼は深々と満足の吐息をもらしつつ、ビロード張りの肘かけ椅子にゆったり座りなおした。[中略]

「きょうのはどっちだい？ モルヒネか、コカインか？」私の口から質問がとびだした。

膝の上に広げていた古いドイツ文字で書かれた書物から、彼はもの

うげに目をあげた。

「コカインだよ」と言う。「七パーセントの溶液だ。きみもやってみるかい？」(Doyle, *Homes* I:123；ドイル『四人の署名』8-9)

驚くべきことに、『ドリアン・グレイの肖像』もまた、一人はボヘミアンの、一人は実直な男性二人が私室でくつろぎ、会話を交わすという同じ情景から始まっている。

ヘンリー・ウォットン卿はペルシャの鞆袋を使った長椅子に横たわり、いつものように際限なく煙草をふかしながら、蜜のようにかぐわしく蜜のような色をした金蓮花がきらめくのを眼に止めた。震えを帯びた金蓮花の茎は、炎のようなその美しい花の重みに耐えきれそうにないようだ。[中略]

「これは君の最高傑作だよ、バジル、今まで描いた中で最高だ」ヘンリー卿はものうげに言った。(Wilde 18)

ホームズのコカインに対してヘンリー卿の煙草という、それぞれ常習の悪癖に染まりながら、肘掛椅子／長椅子にゆったりと腰かけ、「ものうげ」(languidly)に最初のセリフを口に出す。世紀末の倦怠を体現した主人公たちの姿は偶然というにはあからさますぎるほど似通っている。「この世で一番恐ろしいのは倦怠[アンニュイ]だよ、ドリアン。許すことの出来ない唯一の罪だ」(153)と嘯く貴族に対し、探偵は「とにかくこうしてなんの刺激もなく、毎日をだらだらと過ごすのなんて、反吐が出る。精神の高揚をこそぼくは渴望する」(Doyle, *Sherlock Holmes* I 124；ドイル『四人の署名』10)と断言するのだ。『シャーロック・ホームズの冒険』(1892)の掉尾を飾る「櫛の木屋敷の怪」で、「芸術それ自体のために芸術を愛する者なら[中略]とるにたらない低俗な作品のなかにも、強い興味を見いだすことはよくある」(Doyle 492；ドイル『冒険』467)と述べる初期のシャーロック・ホームズの造形には、山田勝がつとに指摘する通り、19世紀末のボヘミアン的芸術家像が窺える(山田 21-40)。

『四人の署名』においては別にもう一人、ドイルからワイルドへの目配せ

ともとれそんな人物が登場する。事件の鍵を握る人物の一人サディアス・ショルトーは、ロンドン郊外の邸宅を「芸術のオアシス」として飾り立て、「私は喧騒から身を引いた、あえて言えば洗練された趣味の持ち主です。そして警察官ほど美的ならざる存在はありません。私は粗野な物質主義には生理的に虫酸が走ります」(Doyle 143；ドイル『署名』46)と述べる滑稽な小男として描かれる。芸術至上主義者のカリカチュアだろう。とはいえ、既に述べたように、名探偵たるホームズ自身が一種のポヘミアンかつ芸術至上主義者として表象されていることを考えれば、『四人の署名』から『シャーロック・ホームズの冒険』にいたるテキストで、ワイルドの唯美主義に対する姿勢は両義的なものにとどまっているといえそうだ。

「六〇もの数の作品に登場するうちには彼[ホームズ]の性格も徐々に変化し、ヴィクトリア女王の肖像を拳銃の標的にして平然としているコカイン中毒のデカダンから、いかにも英国紳士然とした愛国主義者になっていく」(富山 460)のだとして、こうした変貌にワイルド裁判(1895年)が間接的な影響を与えている可能性はあるだろう。

『回想と冒険』の婉曲な叙述を除けば、ワイルド裁判についてドイルが言及することはなかった。とはいえ、裁判の直後に刊行された『ロドニー・ストーン』(1896)は注目し値する。1851年に語り手ロドニーがリージェンシー時代を回顧する形式をとった歴史小説である。「摂政を中心とする華美志向とモラルの低落ゆえに後代に悪名を残すことになった時代」であり、「ドイルという作家の性格からして、歴史小説の舞台としてこのような時代を選び取るということは大きな矛盾のように見えるであろう」と富山太佳夫は指摘する(203-04)。富山によれば、『ロドニー・ストーン』で描かれる19世紀初頭のダンディ像は、ワイルド的な19世紀末ダンディへのアンチテーゼだということになる。「一八九六年にこの小説を書いたドイルの念頭にあったのは、その前年、クイーンズベリー卿に名誉棄損で訴えられていた同性愛のダンディ、オスカー・ワイルドに違いない。ドイルのダンディ論はワイルド的な耽美の世界にかまけるダンディへの批判として書かれているのだ」(206)。

『ロドニー・ストーン』の中にワイルドの影を読み取る解釈はおそらく正しい。だが、テキストから読み取れるのは必ずしも一義的な批判ではなく、

やはりワイルド的ダンディへの両義的な態度である。『ロドニー・ストーン』で、高名なダンディである叔父に案内されて服を仕立てに行った語り手は、その場でポー・ブランメルと鉢合わせする。「私がこれでぜんぶ終わってほしいと思ったところに、若いブランメル氏が現われた。叔父よりもさらに徹底した洗練ぶりで、私の服について二人のあいだで仔細に検討されることになった。このブランメルは立派な体格の男で、美貌に憂いをたたえ、明るい茶褐色の髪、薄茶色の頬髯を蓄えていた。態度はものうげで (*languid*)、声は間延びし、その饒舌は叔父をして顔色なからしめるほどだったが、叔父の気取りの裏にある男性らしさや決然たる風は欠けていた」(Doyle, *Rodney Stone* 137-38)。叔父はブランメルについて、「あの男はまもなく私にとって代わるだろう」と評する。「まだほんの若造だし、家柄も大したことはないが、冷静さと鉄面皮さ、生まれつきの趣味のよさ、そして途方もないおしゃべりで道を切り開いてきたんだ。あんなに洗練されたやりかたで無礼なことができる人間はいないよ。うすら笑いを浮かべ、独特のやり方で眉を上げてみせるんだから。そのせいでいつか撃たれる羽目になるぞ」(141)。家柄ではなく、趣味と話術で社交界の寵児に上りつめるダンディの姿は、容易にオスカー・ワイルドと重ね合わせることができる(仮に「美貌に憂いをたたえ」と訳した“*long, fair face*”を、文字通り「長い顔」ととれば、なおのこと)。

しばらくのち、パーティーの席上で、旧世代ダンディの代表格である叔父と新世代ダンディのブランメルが流行をめぐる論争を始めるのだが、やがて「議論は終わりを告げた。クイーンズベリー侯爵がブランメルの腕に自分の腕を絡めて連れ去ったのだ」(149)。ここで登場するクイーンズベリー侯爵は、むろん、ワイルドと裁判で争った9代目の祖父にあたる7代目だ。だが、誰でもよかったはずのブランメルを連れ去る役割を、ドイルはなぜあえてクイーンズベリー侯爵に与えたのか。答えは明らかに思える。時代の寵児たるダンディがクイーンズベリー侯爵の手で社交界から連れ去られるという情景に、前年のワイルド裁判を想起しない方が難しい。そして侯爵とダンディが「腕を絡めて」退場するという男性同士の親密さを示す描写には、ワイルド裁判に対する批評性とまではいわないまでも、ワイルドを断罪した秩序の側には回収しきれないテキストの余剰が読み取れる。

ドイル作品におけるワイルドの影響を辿る場合、見落とせないテキストが、シリーズ最後の短篇集『シャーロック・ホームズの事件簿』(1927)に収録された「高名の依頼人」である。本編の敵役であるグルナー男爵は、芸術を愛好する一方、女性を弄ぶ悪徳貴族で、その容貌はドリアン・グレイを彷彿とさせる。「確かに、群を抜く秀麗な容姿だった。美男として、ヨーロッパじゅうに名をとどろかせただけのことはある。体格は中ぐらいだが、体つきがいかにも優雅で、しかもしなやかだ。肌の色は、東洋的といってもいいほど浅黒く、大きくて黒い目はものうげ(languorous)で、そんな目で見られると、女性は手もなくふらっとなるだろうと思われる」。ワイルドの小説の主人公と同様、男爵もまた永遠の若さを保っている。「年のころは三十をすこし出たばかりと踏んだが、あとで知ったところによると、もう四十二だという」(Doyle, *Holmes II* 533; ドイル『事件簿』51-52)。

しかし、先行テキストを最も強く想起させるのは小説のクライマックスだ。男爵はかつて破滅させた女性に硫酸を浴びせられる。「浴びせられた濃硫酸が顔じゅうを腐食させ、耳やあごからもしたたっている。片目はすでに白濁しているし、もういっぽうは真っ赤にただれている。ほんの数分前、私が感嘆してながめたあの秀麗な面が、いまは見るかげもない。まるで画家が書きかけの見事な絵の表面を、濡れて汚れたスポンジでこすったかのような。目鼻だちはくずれ、変色して、人間のものとも思えぬ顔。おぞましい」(535; 56-57)。唐突な絵画との類比と、美しかった顔の変貌は、『ドリアン・グレイの肖像』の結末と酷似する。「高名の依頼人」は『回想と冒険』と同じ1924年に発表されている。回想録で『ドリアン・グレイの肖像』を高く評価しつつ、その主人公を卑劣な悪役として書き直すドイルは、晩年にいたってもなお、ワイルドと世紀末唯美主義に対する両義的な態度を保っている。

3. プライバシーと秘密、そして暴露

ここまではドイル作品に見られるワイルド作品、およびワイルド本人のイメージとのインターテクスチュアリティを考察してきた。だが、同時代を生きた二人の作家は、いくつかの重要な主題を共有している。その中から、今回は「秘密」という主題を両者がどのように扱っているかを検討

していきたい。

もちろん「秘密」という概念自体は決して新しいものではない。しかし、近代以降、公的領域と私的領域の再編成が行われたことによって、「秘密」は「プライバシー」概念の成立と密接に関連しながら、新たな意味を担うようになる。「こうしてフランス革命以後、公開性こそが政治の第一の基礎となる。[中略]その反面、一九世紀以降の市民社会では、秘密は私的なものの領域に移植される」(大竹 57)。大竹も言及するドイツの社会学者ゲオルク・ジンメル(1858-1923)——ワイルド、ドイルと正確な同時代人だ——は、『社会学』(1908)の中で次のように述べている。

この意味における秘密、つまり消極的あるいは積極的な手段によって支えられた現実の隠蔽は、人類の最も偉大な達成のひとつである。幼稚な状態においては、あらゆる考えがただちに言いあらわされ、あらゆる企てがすべての人の目につきやすいが、この状態に対して生活の途方もない拡大が秘密によって達成される。なぜなら生活の多種多様な内容は、完全に公開されたばあいにはけっして現れることができないからである。秘密は、公然たる世界とならぶ第二の世界のいわば可能性をあたえ、そしてその公然たる世界は、この第二の世界の可能性によってきわめて強く影響される。

二人の人間あるいは二つの集団のあいだのあらゆる関係は、そこに秘密が存在するか否か、さらに秘密がどれほど存在するかの問題によって性格づけられる。それというのも他方が秘密の存在に気づかないばあいさえ、いずれにせよそのことによって隠蔽者の行動が、それゆえにまた関係の全体が、やはり変化させられるからである。(ジンメル371)

「秘密」を人間社会の成立の根本的な条件とみなすジンメルの考察は、19世紀後半から世紀転換期にかけて「秘密」と「プライバシー」をめぐる言説が猖獗を極めていたことを考えれば決して特異なものではない。『リピンコッツ・マガジン』に『四人の署名』と『ドリアン・グレイの肖像』が発表された1890年、同じアメリカで、法学者サミュエル・ウォレンとルイス・

ブランダイスは、『ハーヴァード・ロー・レビュー』誌に論文「プライバシーの権利」(“The Right to Privacy”)を發表し、新たな権利としてのプライバシーを提唱している。時代の近接性は偶然ではない。ワイルドがそれで裁かれることになる1885年改正刑法は、「私的領域」への公的権力の侵入を意味するものであり、何をプライバシーとして守るべきなのかを改めて問う事態を出来させたからだ。自身が同性愛者であり、ワイルドとも面識があったウォレンは『ドリアン・グレイの肖像』を読んでいたかもしれないという(Richardson 96-98)。ミーガン・リチャードソンは逆に、「社会主義下の人間の魂」(1891)を執筆したときのワイルドがウォレンとブランダイスの論文を知っていた可能性も示唆する(99)。ジャーナリズムの暴露主義を批判しながら、ワイルドは「男性と女性の私生活は公衆に語られるべきではない(The private lives of men and women should not be told to the public)。それは公衆とはまったく何も関係のないものだ」(Wilde 1095)と強調する。

けれども、プライバシーは、公開の危険にさらされているからこそ守られるべき領域として成立する。秘密は暴露の危険がなければ隠す必要すらないのだ。ジンメルはこの点について次のように述べる。「ところで秘密のこの魅力と独特の仕方て結びつくのが、その論理的な対立物、漏洩の魅力である。——明らかにこの魅力も少なからず社会学的な性質をもつ。秘密は緊張を含んでおり、この緊張は秘密が明らかにされた瞬間に解消される。[中略]それゆえ漏洩の可能性と誘惑が秘密をめぐるちらつき、深淵の魅力にも似た告白のこの内的な危険が、発見されるという外的な危険ともつれあっている。秘密は人びとのあいだに限界をもうけるが、しかし同時に漏洩あるいは告白によってその限界を破るという魅惑的な刺激をもあたえる」(ジンメル 374)。19世紀イギリスにおける小説の構造自体が、プライバシーとその暴露に支えられているとD. A. ミラーは指摘する。

おそらく、文化制度としての「小説」が支えていると思われるもっとも根本的な価値とは、プライバシー、つまり欠けるところのない自律的で「隠れた」自己を確定することだ。小説を読むことは読む主体が他者の監視や疑いや読みやレイプから安全でいられる空間の存在を、当然のこととしている。しかしこのプライバシーはつねに、互

いを監視しあい、疑いあい、読みあい、レイプしあうキャラクターたちのことを読む自由だとされる。厳格なプライバシーを備えた主体であるわれわれは、犯され客体化された主体[小説の登場人物]について読むばかりか、彼らについて読むという行為そのものによって、彼らを犯し客体化するのに大きく加担する。われわれは、プライバシーが侵害されるのを見ながら、つまりそれ自体プライバシーの侵害であるのぞき見という行為をおこないながら、わが身のプライバシーを楽しむのだ。[中略]この事態が「小説」そのものの構造に組み込まれているのだ。(ミラー 204-05)

ただし小説における「秘密」は、本質的にパラドキシカルな位置づけにある。読者にその存在を明示されなければならないが、同時に読者から隠されていなければならない。こうした秘密と暴露の弁証法がもっとも効果的に用いられるジャンルとして考えられるのは、19世紀末に発達した探偵小説だろう¹。ドイルはもちろんのこと、「アーサー・サヴィル卿の犯罪」と『ドリアン・グレイの肖像』のワイルドもまた広義のミステリーの書き手だったことは言うまでもない。イヴ・コゾフスキー・セジウィックは『ドリアン・グレイの肖像』について「過剰な否認と見せびらかしとが結びついて形作られた、ガラスのクローゼットすなわち公然の秘密のレトリックの、ある意味で完璧な神髄である」(セジウィック 233)と述べ、それが同性愛作家としての歴史的状況が生んだものだと論じている。セジウィックの指摘に十分な正当性を認めつつも、『ドリアン・グレイの肖像』における秘密の表象には、犯罪小説的なプロットを採用したことによるジャンルの拘束——それ自体が歴史的なものなのだが——が働いていることを看過すべきではない。

4. 読まれない手紙

では、読者に示されつつ隠されるべき「秘密」は小説の中でどのような表現をとりうるのだろうか。一つの方法として考えられるのが「手紙」である。秘密の社会学的考察を行いながら、ジンメルは述べている。「明らかに手紙は、また秘密保持のカテゴリーからしても、まったく独特の状況

を示すからである。まず第一に書面にするということは、すべての秘密保持とは対立する本質をもつ。[中略]書かれたものは客観的な存在をもち、この客観的な存在は、秘密のままであることをいっさいの保証を否定する」(ジンメル393-94)。だからこそ、ミステリーの中の手紙は、「読まれない」ことによって秘密のパラドクスの完全な表象として物語の中で力を発揮する。ジャンルの出発点であるエドガー・アラン・ポーの「盗まれた手紙」(1845)が既にこのような手紙の用い方をしている。この短篇小説のなかで、犯人とデュパンが奪い合う手紙は、最後までその文面を明示されないままである。

秘密の手紙について、ワイルドとドイルがともに影響を受けた先行テキストである、R. L. スティーヴンソン『ジークル博士とハイド氏』(1886)を読んでみよう。友人ラニヨンの死後、弁護士アタソンは彼からの遺言を受け取る。

その夜、アタソンは鍵を掛けて事務室にこもると、蠟燭の憂鬱な光のもと腰を下ろした。そして親友ラニヨンが署名し封印した封筒を取り出し、目の前に置いた。「極秘 (PRIVATE)。J. G. アタソンのみ開封可。かりに同君がわたしより先に死亡せる場合は、何人も読まずに破棄すべし」と表書きに強調されていた。弁護士は内容を見るのが怖かった。「友を一人、葬ったばかりだというのに」アタソンは考えた。「この手紙のせいでもう一人の友まで失うことにならないだろうか？」こんなふうにおびえていてはラニヨンの信頼に背くことになると考え、封印を解いた。中に入っていた別の封筒もやはり封印され、表に「ヘンリー・ジークル博士の死亡もしくは失踪のときまで開封すべからず」と書かれていた。[中略]遺言執行人たるアタソンは大いに好奇心をそそられた。封筒に書かれた禁止令に背いて、ただちに謎を究明したかった。けれども職業的良心と亡き友人への信義を裏切るわけにはいかない。こうしてラニヨンの残した封書は金庫の奥深くで眠ることになった。(Stevenson 30；スティーヴンソン 50)

ここでは、事件の秘密を語った手紙が、幾重にも封印されたうえで金庫に

秘匿される。この時点で内容を読まれないことはプロット上の必然なのだ——というより、『ジーキル博士とハイド氏』は、いくつもの手紙が徐々に姿をあきらかにしていく過程を描いた物語だとさえいえるかもしれない。

とはいえ、ミステリーにおいて手紙は「恐喝」と結びつくとき、その秘密と暴露の弁証法をもっともあからさまに提示することになる。アレクサンダー・ウェルシュは、主にセンセーション・ノベルとジョージ・エリオットの小説について論じながら、「現代的な意味での恐喝——すなわち、秘密を暴露すると脅して金をゆすりとること——は19世紀後半のイギリス小説において人気のあるテーマだった」(Welsh 3)と指摘するが、それが特に顕著なのは19世紀末の犯罪小説群においてであろう。『性のアナーキー』でエレイン・ショウォールターが指摘する通り、『ジーキル博士とハイド氏』においてさえ、ジーキルに対するハイドの恐喝が仮定されているのである(ショウォールター 200)。

『ドリアン・グレイの肖像』では、画家を殺害したドリアン・グレイが、化学者アラン・キャンベルに死体の処理を頼む場面に、「読まれない手紙」のもつ力が最大限に発揮されている。「やめろ、グレイ、それ以上知りたくない。君の話が本当だろうが嘘だろうがどうでもいい。君の人生には絶対にかかわらない。君のおぞましい秘密(your horrible secrets)は君だけのものだ。もうそんなものには興味がない」(Wilde 129)とあって関与を拒むキャンベルを、ドリアンは手紙を持ち出して脅迫する。

ドリアン・グレイの目に先ほどと同様の憐れみが浮かんだ。それから手を伸ばして一枚の紙を取り、そこに何かを書きつけた。二度読み返してから、丁寧に折りたたみ、テーブル越しにキャンベルに渡した。そして立ち上がり、窓辺に行った。

キャンベルは驚いたようにドリアンを眺め、やがて紙片を取り上げて開いた。読むにつれて顔は真っ青になり、椅子にぐったりもたれかかった。おぞましさに吐き気が込み上げた。心臓が空洞の中で死にそんなほど脈打っているのを感じた。

「すまない、アラン」ドリアン・グレイはつぶやいた。「でもこうするしかないんだ。手紙はもう書いてある。これだよ。もし君が手伝っ

てくれなければ、この手紙を出さなければいけない。その結果、どうなるか分かるだろう。でも君は助けてくれるはずだ。もう断ることは不可能だからね」(131)

ドリアンがキャンベルに向かって何を書いたのか、また「手紙」には何が書かれているのかが読者に明かされることはない。だからこそ、手紙は語り得ぬ「秘密」そのものとして効果を発揮するのだ。

ことはドイルでも変わらない。そもそもホームズは、手紙を筆跡や紙質といった外見において重視し、ほとんど文面を「読まない」探偵なのである²。中でも、内容ではなく手紙という「モノ」が最大の問題になるのは、やはり恐喝が主題となる「恐喝王ミルヴァートン」(1904)である。ホームズは敵役についてこう説明する。「秘密だの、よからぬ風評だのをミルヴァートンに知られた男は——女性の場合はなおさらのことだが——もはや命運が尽きたも同然。やつは、にこやかな笑顔と、大理石そこのけの冷たい心とで、じわじわと相手の首根っこを締めあげ、搾りあげて、からからになるまで搾りつくす。[中略]そのやりくちというのは、こうだ——金持ちや地位のある人物について、その立場をあやうくさせるような手紙の類があったら、いつでも最高の高値で買いとる、そんなうわさを流布させる。そうやって、その種の品を恩知らずな従僕やメイドから買い集めるんだが、それだけじゃない、紳士の仮面をかぶったならずものが売り手になるってことだって、ちよくちよくある——疑うことを知らないご婦人がたから、口舌巧みに愛情やら信頼をかちとるやからだよ。ミルヴァートンはけっしてけちなやり方をしない。僕がたまたま知ったところでは、たった二行の手紙のために、ある貴族の従者に七百ポンド支払ったこともあるが、結果としてそれが、その貴族一家の破滅につながった」(Doyle Holmes I 907-08；ドイル『復活』281)。ホームズは依頼を受けて、ある貴族の娘が書いた「何通かの無分別な手紙」(908；283)をミルヴァートンから取り戻すのだが、その手紙の中身は決してテキストに記されることはない。問題となるのはあくまで「秘密」であり、手紙は「秘密」を顕しつつ隠す記号として機能しているのだ。

こうして19世紀末のワイルドとドイルの小説において、私的領域と公

的領域の境界にある手紙が、暴露の危険に脅かされる「秘密」の表象として登場することが確認できた。けれども「秘密」「手紙」「暴露」をめぐる言説は、むろんフィクションの領域にとどまらない。アルフレッド・ダグラスに宛てた書簡の形をとった、ワイルドの『獄中記』(1905)の一節が、それを証し立てている。

面会に来てくれたロバート・シェラードから、[中略]君がああ愚劣な『メルキュール・ド・フランス』に、私の手紙をいくつか引きながらワイルド論を発表しようとしていると聞いた。シェラードはそれが本当に私の望みなのかを尋ねた。私は驚愕し、不快になって、ただちにそんなことはやめさせるようにと命令した。君が僕の手紙をそのへんに置きっぱなしにしたせいで、脅迫者たち(blackmailers)に盗まれ、ホテル従業員にかすめ取られ、女中が金に換える材料になったじゃないか。要するに、君に僕の手紙の真意を読み取る能力がなかったせいだ。でも、手元に残った手紙を公表しようとするなんて、まったく信じられない。どの手紙なのか？ まったく情報が得られなかった。(Wilde 900)

一度手元を離れた手紙は書き手のワイルドにとってさえ「情報が得られず、すなわち読みえない「モノ」となって、暴露の恐怖を伴った「秘密」の具体化として流通するしかない。

ここで改めて、冒頭で引用したドイルの回想録を思い出そう。ドイルは自身のワイルドへの言及を、「真のワイルドの姿」を示す手紙の引用でしめくくっていた。ただし手紙の前半部分はドイルによって「省略」されている。さらに、ワイルドの書簡集はこの手紙を『回想と冒険』から引用し、現物は残っていないと告げる。ワイルドとドイルという、19世紀末に「秘密」の文学的表象に取り組んだ二人の作家の交流は、読者には読みえない一通の手紙によって伝えられているのだ。

*本論文は日本ワイルド協会第43回大会(2018年12月8日、青山学院大学)のシンポジウム「オスカー・ワイルドとコナン・ドイル」での口頭発表に基づくものである。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズの引用は東京創元社版、スティーヴンソン『ジークル博士とハイド氏』の引用は集英社版の訳文を使用し、文脈に応じて適宜変更を加えている。

注

- 1 秘密と暴露の弁証法が重要な役割を果たすもうひとつのジャンルは、これもワイルドと無縁ではないボルノグラフィである。ヴィクトリア時代イギリスを代表する匿名作家のボルノグラフィ、その名も『我が秘密の生涯』(*My Secret Life*)は、1888年から1894年にかけて、まさにワイルドやドイルの一連の犯罪小説が書かれたのと同時期に刊行されている。
- 2 例えば「ボヘミアの醜聞」(1891)では便箋の透かしから情報を読み取り、「花婿の正体」(1891)では手紙の文面はまったく読まれず、文字を打ったタイプライターの機種が犯人を突き止める手がかりとして用いられる。

Works Cited

- Doyle, Arthur Conan. *Rodney Stone*. Eveleigh Nash & Grayson Ltd, 1921.
- . ‘The Adventure of Charles Augustus Milverton’ in *Sherlock Holmes: The Complete Novels and Stories*. 2 vols. Bantam, 1986.
- . *Memories and Adventures*. Cambridge UP, 2012.
- Richardson, Megan. *The Right to Privacy: Origins and Influence of a Nineteenth-Century Idea*. Cambridge UP, 2017.
- Stevenson, Robert Louis. *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Tales*. Oxford UP, 2006.
- Welsh, Alexander. *George Eliot and Blackmail*. Harvard UP, 1985.
- Wilde, Oscar. *Complete Works of Oscar Wilde*. Harper & Row, 1989.
- 大竹弘二『公開性の根源 秘密政治の系譜学』太田出版、2018。
- ショウォールター、E.『性のアナーキー 世紀末のジェンダーと文化』富山太佳夫 他訳、みすず書房、2000。
- ジンメル、ゲオルク『社会学』上、居安正訳、白水社、1994。
- スティーヴンソン、R. L.『ジークル博士とハイド氏』大久保謙訳、『ポケットマスターピース08 スティーヴンソン』辻原登編、集英社、2016、9-103ページ。
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー『クローゼットの認識論 セクシュアリティの20世紀』外岡尚美訳、青土社、1999。
- ドイル、アーサー・コナン『シャーロック・ホームズの冒険』深町眞理子訳、東京

創元社、2010。

——『四人の署名』深町眞理子訳、東京創元社、2011。

——『シャーロック・ホームズの復活』深町眞理子訳、東京創元社、2012。

——『シャーロック・ホームズの事件簿』深町眞理子訳、東京創元社、2017。

富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末 増補新版』青土社、2015。

ミラー、D. A. 『小説と警察』村山敏勝訳、国文社、1996。